

友の会だより

VOI.1 1989. 2

茨城県近代美術館友の会



小杉未醒 (1881~1964) 「楽人と踊子」 大正10年頃 (館所蔵品)

栃木県日光に生まれた小杉未醒は、はじめ西洋画を描き、のち日本画に転じた異色の画家です。この「楽人と踊子」(部分)は、大正時代の外遊を契機として東洋画的世界に心をひかれ、次第に日本画を多く描くようになる時期の作品です。欧州の華やかな民族衣装を身にまとった娘たちが音楽に合わせて軽やかに踊っています。シンメトリーの単純な画面構成とともに、装飾性の強い作品といえるでしょう。そこには、清らかで幸福に満ちた雰囲気が漂っており、小杉芸術の特質をよく伝えています。

友の会だより

VOL. 2

Aug. 1989



「白いリボンの少女」
ジュール・パスキン
1928年
(北海道立近代美術館蔵)

ジュール・パスキン（1885—1930）は、エコール・ド・パリの画家の一人です。彼は、柔らかな線と淡い色彩で、ものうげな半裸の女性像を数多く描きました。この「白いリボンの少女」は、クッションに横たわる少女をモデルにしたものですが、彼独特の線描と色彩が、少女のふくよかさ、やさしさを表す上で、非常に効果を見せています。見る者の心をあたたかく包みこむような、詩情豊かな作品です。

8月5日～27日、ファミリーびじゅつかん「名作にみる世界の子供たち展」で展示

茨城県近代美術館友の会

游美

VOL. 3

Nov.1989



「美人観蛙戯図」河鍋暁斎

鋭い風刺あり、ユーモアあり、また怪異ありと、奇想に富み、多彩で幅広い作画活動を展開した河鍋暁斎（天保2年～明治22年）が没して、今年がちょうど100年目に当たります。

現在の茨城県古河市に生まれた暁斎は、はじめ狂斎と名乗っていましたが、後に、狂と同じ音を持つ暁の字に書き改め、暁斎と名乗るようになりました。

縁先の葡萄棚の下で蛙の相撲にうち興じる美人を描いたこの作品は、蛙の擬人化を行なうなど通常の納涼図には見られない、暁斎独自の視点があり、また、人物や蛙の動態表現にも、暁斎ならではの巧みな手際が示された秀逸な作品といえるでしょう。

11月18日(土)～12月24日(日)「没後100年記念河鍋暁斎展」で展示

茨城県近代美術館友の会

MOA美術館

遊美

VOL.4

Mar. 1990



「肘掛け椅子の婦人」
 ピエール・オーギュスト・
 ルノワール 1874年

ルノワールは、微妙な光の反映を肌を含んだ婦人像を多く描きました。この作品は、1870年代における印象派時代の典型的なものであり、晩年の作風とは、色調も形態のとらえ方も異っています。しかし女性を描くことの歓びは生涯変わりません。その芸術に深遠な哲学や思想性を求めることはできませんが、彼の描いた若い女性の肌の美しさは、やはり驚嘆に値するものといえるでしょう。

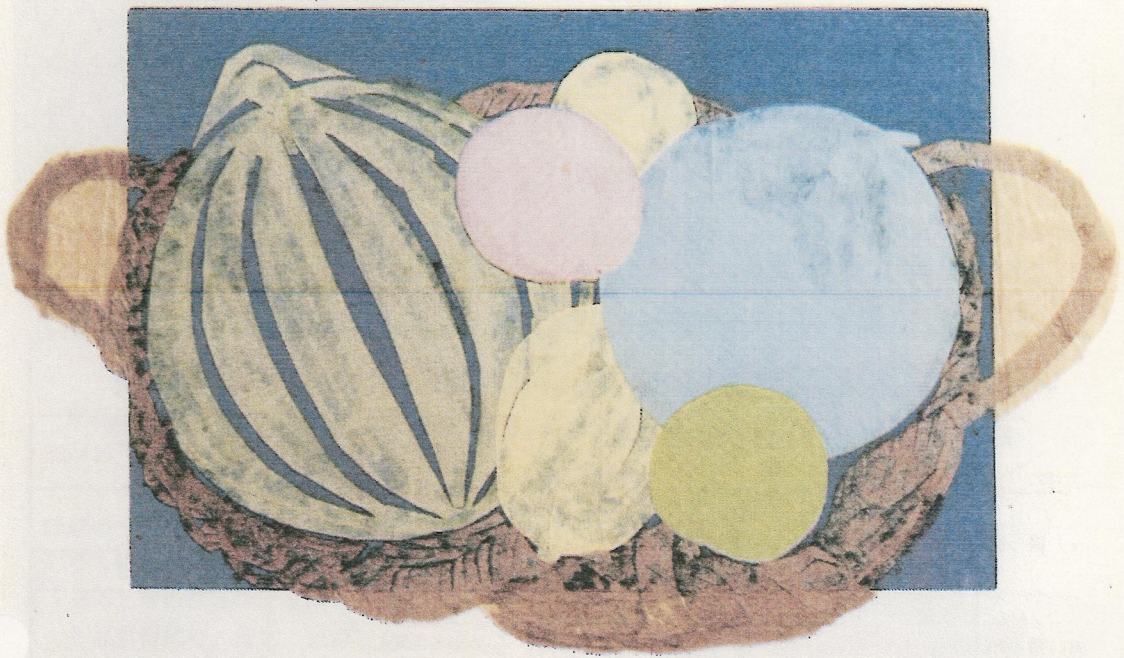
3月17日(土)～4月22日(日)「デトロイト美術館展」で展示

茨城県近代美術館友の会

游美

VOL. 5

JUL. 1990



「くだものかご」高村智恵子

心の病に冒された智恵子が、いつの頃からか始めた繊細な紙絵は、見舞いに訪れる夫光太郎のためだけに作られ、他の人には一切見せなかったそうです。おみやげにもらった果物をモチーフに、マニキュア用の小さい鋏で器用に切り抜き、薄い色紙を重ねて貼れば、下の色が混じって微妙な効果を表します。詩人・彫刻家高村光太郎の多くの作品と智恵子の紙絵とによる彼らの造型世界の展覧会を心ゆくまで御鑑賞下さい。

6月23日(土)～7月22日(日)「高村光太郎・智恵子 ― その造型世界」で展示

茨城県近代美術館友の会

遊美

VOL.6

NOV.1990

ピカソ美術館



「青銅時代」
オーギュスト・ロダン
1875～76年
180×80×60cm

生命感に満ちあふれ、今にも歩き出しそうに見えるこの作品は、あまりの迫真性ゆえに、人間から直接型取りをしたのではないかという中傷を受けました。イタリアで、ミケランジェロの作品に大きな感動を受けて帰ってきたばかりの、36歳の時の作品です。はじめは、左手に槍を持った負傷兵として構想されていました。数多くの彫刻、素描、写真資料によってロダンを様々な角度からご覧いただけます。

11月3日(月)～12月9日(日)「生誕150年記念ロダン展」で展示

茨城県近代美術館友の会

游美

VOL.7

MAR.1991



川端龍子
 「天橋図」
 244×147
 1960年

日本三景の一つ
 丹後の天の橋立。
 古来より雪舟など
 多くの画家によっ
 て描かれてきた。
 いかにも奇知に富
 む龍子らしく、上
 空から見おろした
 角度で、松茂る3
 キロの長州をとら
 えた。

2月16日(出)～3月24日(日)「戦後日本画の名作展」で展示

茨城県近代美術館友の会

游美

VOL. 8

JUL. 1991



「千与四郎」 六曲一双屏風（部分） 横山大観 1918年

大観が50歳の時に描いた作品。大正7年の第5回院展出品作。お茶の宗匠、千利休（幼名与四郎）が、庭を掃き清める場面を濃彩により描く。わざわざ木の葉を散らし、風情を添えたという有名な逸話に因んでいる。宗達や光琳に学んだ、たらしこみ技法のにじみが活かされている。

9月21日(土)～11月4日(月)「横山大観名作展」で展示

游美

VOL. 9

NOV. 1991



ノートル＝ダム大聖堂「7月の陽光」

アルベール・マルケ 1922年

パリを流れるセーヌ川、その中洲にそびえたつノートルダム寺院の風景をアルベール・マルケは、独特の淡い色調で描いています。

マチスの友人でもあったマルケは、原色を駆使するフォーヴィスム（野獣派）からはすぐにぬけ出して、このような詩情に富む作品を多く残しました。

1992年1月11日(土)～2月23日(日)「アルベール・マルケ展」で展示

茨城県近代美術館友の会

游美

VOL. 10

MAR. 1992



「夕暮」上村松園 1941年

2月29日(土)～3月29日(日)「昭和戦前期の日本画展」で展示

「西陽はもうかしいで、あたりはうすぼんやりと暮れそめでも、母は気づかぬげに針の手を休められない。私は晩御飯の用意を心配して、子供ごころに空腹を案じながら、そのうしろにじっと坐って母の背中をみつめている。ふと、静かに母の針のはこびがとまる。「もう一寸、ほんのこれだけ縫うたらしまいのんやよって……ほんに陽のめが昏ろうなった……」なかば独りごち、なかば背後の私にうかのようになく小さな声でそういわれて、つと障子の傍らまでいざりよられ、じっと針の目を通そうとなさっている。……その姿が、私の幼な心にも、この上なくひとすじに真剣な、あらたかなものに想われたものでした。」

松園の談話をもとにした唯一の随筆集

「青眉抄」から

茨城県近代美術館友の会